

# 指示待ち選手の形成過程

—過去のコーチングアプローチに着目して—

津川 太一 (競技スポーツ学科 コーチングコース)  
指導教員 鳥羽 賢二

キーワード： 主体性 指示待ち コーチングアプローチ

## 1. はじめに

2006年に改定された教育基本法では、学生に自主及び自立の精神を養い「生きる力」を身につけさせることを教育目標にしている。しかし、現状は学生の自主的活動として行われる運動部活動であるにも関わらず、その中に指示待ち族が多く存在している。このことを問題と捉え、その要因を明らかにし解決策を求めた。

## 2. 研究方法

- ①文献調査：学生スポーツの意義等
- ②予備調査：インタビュー調査（9名）
- ③アンケート調査：対象者の本学運動部員150名（130名の有効回答）を分析、検証。

## 3. 調査結果と考察

本学における主体性の低い学生は約6割（指標より）存在し、指示待ち選手の要素を多分に含むものになっている。

過去に受けたコーチのタイプを調査すると、3つの特徴が浮き彫りになった。（表1参照）

表1 選手が受けた主なコーチングタイプ

指示待ち選手
①専制的及び融和的な指導の者が半数以上を占めている
②主体的な行動や積極的な意見に対してコーチから尊重あるいは評価されていない
主体性の高い選手
③民主的コーチの影響を受けている

これら①②タイプのコーチングアプローチは選手の自信を失くし、また、失敗に対する恐れから過度にコーチへの依存度が高くなる。加えて指示待ち選手は、生活リズムが不規則で学習面を疎かにしている傾向が明らかとなった。

## 4. 主体性をもたせるための選手形成

図1の下段で示した一方的な専制的指導は、前述したようにコーチに対する依存性を高め、自主性や積極性を欠落させることに繋がる。また、融和的アプローチは、チーム内で緊張感がなくなり規律が育たなく、これらが結果として指示待ち選手の排出に繋がっている。

自主自律型選手の育成は、学生自ら課題を発見し、その克服も自身の力で出来るようにすることである。そのためにコーチは、双方向のコミュニケーションを図りながら図1の上段に示したような具体策を投じなければならない。ただスポーツ活動には、強くは上がらなくてはならない時があり、特にプラト一期には、コーチが一方的に励ますことを忘れてはならない。その結果、学生はスポーツを通じて自主自律の精神を養い、指示待ち族から脱出し、自ら考えて行動できる人間に成長していくといえる。

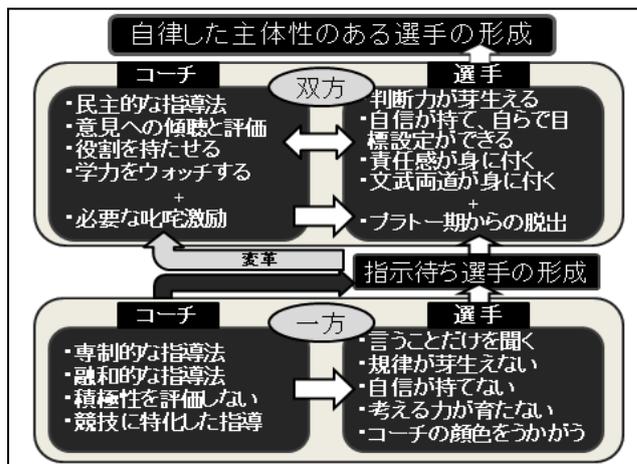


図1 コーチングアプローチの変革モデル

## 引用・参考文献

結城 浩 (1999) 『教えるときの心がけ』

1) 他人から指示を受けるまで自らの意思では行動できない者